資料-8

＜2022.6.14 環境省公表　国立・国定公園 総点検事業フォローアップ結果＞
・環境省は全国14候補地(実質23地区)の国立・国定公園の新規指定・大規模拡張候補地を選定
・候補地は2030年まで自然環境調査を継続し、随時生態系保全を主眼とする大規模拡張を目指す

環境省の対応パターン

国立編入か又は国定新規指定を選択する候補地は
八幡平周辺（森吉山・真昼山地・田沢湖等）のみです

① 既存 の国立・国定公園の拡　張
（10候補地）

② 国立・国定公園の新規指定と拡張
（3候補地）

③ 国立公園への編入又は国定公園の新規指定を選択
（1候補地）

国立公園の分割
（今回は分割計画なし）

森吉山は十和田八幡平国立公園に編入か
又は国定公園新規指定を選択することになる
＜この選択は環境省ではなく北秋田市と秋田県の合意で決定される＞

北秋田市の選択

十和田八幡平国立公園へ
編入を選択

森吉山県立自然公園の指定解除
十和田八幡平国立公園の拡大

・森吉山の自然公園名称が消える。
・地域のアイデンティティーが消える。
・秋田県唯一の独立峰の価値が消える。
・十和田地域とは距離的違和感が大きすぎる。
・ぐるっと森吉山の、あまたの景勝地が十和田八幡平国立公園の暖簾に掛け替えになる。
・公的な観光案内版・観光ガイドやパンフ等が「十和田八幡平国立公園」名に変わる。

森吉山国定公園の
新規指定を選択

森吉山県立自然公園の指定解除
森吉山国定公園の誕生

・秋田県の中心部に聳える独立峰森吉山は、他の山岳観光地との結節点となり得る。
・空港と北欧の杜公園から一望する「森吉山国定公園」の誕生は、北秋田市を北東北観光のハブ拠点となす礎となる。
・その課題は、森吉山のブランド化と着地型観光の推進、宿泊キャパの拡充あるのみ。

十和田八幡平国立公園の
分割の動き

十和田地域　　八幡平地域

十和田奥入瀬八甲田国立公園誕生

八幡平〇〇〇〇〇〇国立公園誕生

＜公園名を冠とする市＞
・青森県：十和田市
・岩手県：八幡平市

（1）自然環境整備交付金（国立・国定共通）
・国立・国定公園の自然環境整備計画は、地方が交付金を活用して実施する事業である。
・総事業費は2000万円又は4000万円を超えるものが対象で、計画期間は3～5年。
・交付金算定は国立公園が事業費の50%、国定公園が事業費の45%である。
併せて都道府県を通じて市町村への交付も行える地方の裁量も高められた。
・事業費の内容や都道府県と市町村の負担割合は、各地域の実情を踏まえ独自に設定が可能。
・秋田県の市町村負担割合は、事業費から交付金を差引いた額の20%である。
（例：事業費1億円の場合の市町村の負担額は、国立1,000万円・国定1,100万円）
※参考：都道府県立自然公園は対象外。また国庫補助整備事業は2005年に全て廃止さている。

（2）誘客関係の推進（国立・国定共通）
・環境省は、国定公園になると国立公園と合わせて国内外のプロモーションを行う。
国定公園は58と多いが、単独の国定公園として紹介されるメリットは大きい。
・環境省は、国立・国定公園の自然を活用した滞在型コンテンツ創出事業（ソフト事業）も募集。

（3）山岳観光のマインド
・憧れの山岳観光地は、花の名山と100～300名山の難易度に温泉郷や秘湯を加味してフィールドを選択する。その選択肢に公園区分のブランド条件は希薄だ。行ってみたら県立・国定・国立であったに過ぎない。
・SNS全盛時代において、国立ブランドで人は動いていない。いつ・どんなとき・どこえ行けば・どんな遊び・どんな食・どんな出会いが待っているか。そこに観るべき絶景や異文化に触れる非日常の体験空間があれば、人は地球の裏や極地まで飛ぶ。そてが観光である。
・森吉山オンリーワンの創造力と発信力の推進は、北秋田市の官民の行動に懸っている。

（4）森吉山国定公園昇格の近道
・八幡平周辺は、八幡平地域本体と森吉山・真昼山地・田沢湖抱返り・大平山に加え、県を跨ぎ岩手県に及ぶ環境調査が確実視されるため、2030年までの調査完了は無理であろう。
・森吉山は単独で国定公園の指定要件を満たしている。国定公園昇格を早めるには環境省の調査終了を待たず、秋田県が既存の面積で環境大臣に申し出を行えば数年以内で昇格が可能。
・環境省の自然環境調査による拡張地域を加える二段方式で国定公園の拡張を図るべし。

（5）十和田八幡平国立公園への森吉山国立公園編入構想は
・十和田八幡平国立公園の分割論が高まる公園区域に、自らの公園名を捨ててまで編入する意義は見当たらない。
・編入するとするならば、十和田八幡平国立公園の発展的な分割が前提であろう。
・まずは、三県の行政と観光関係者等の「分割と未来を語る熱量」を見定める必要がある。
・公園名称に「八幡平森吉山国立公園」という名称が叶うとするならば、国立編入も考察の余地もあろうが、この公園名の実現は地域感情からみて相当難しい課題である。
・北海道の大雪山国立公園（37座）、北アルプス（22座）、南アルプス国立公園（18座）など数十座を束ねる公園名称は簡単に創りだせるものではない。

（6）十和田八幡平国立公園分割の動き
・乳頭温泉郷関係者らは地域のブランド力に視点を置いた八幡平地区の分割論議を重ねてきた。今後はシンポ等を開催し地域の温度差を見極めていきたいとのとだ。
・分割した上信越高原国立公園の西部と東部が25km離れているのに対し、十和田地域と八幡平地域とは45kmも離れている。
・公園利用等の独立性と独自性の観点から鑑みれば、十和田八幡平国立公園の方が分割要件を満たしていると言える。
・今後の動きを見極めたい。

（7）全国の国立公園の分割事例
① 日光国立公園の分割
・尾瀬が日光国立公園内にあることを知らない人は結構いた。
・地元は「日光尾瀬国立公園」に名称変更を要望した。環境省は自然性に恵まれた尾瀬と文化財の観光要素が高い日光を「名前だけではなく「尾瀬の独立を地元に提案」。
・国立・国定公園の見直しを進めていた環境省は、尾瀬を国立公園再編のシンボルとすべく、2007年に尾瀬は独立し、尾瀬国立公園（32,20ha)が誕生した。

② 上信越高原国立公園の分割
・上信越高原国立公園は、1949年に志賀高原・谷川・苗場・草津・万座・浅間地域（西部地域)が指定。その後、1956年に妙高・戸隠地域（東部地域）が編入された。
・今回の総点検の結果、西部と東部地域とは異なる風景形式を有していることが判明。
・また、利用面においてもそれぞれの地域が独立性・独自性を有している。
・以上の観点から西部地域を分離し、2015年に妙高戸隠連山国立公園（39,772ha）が誕生した。